

五人の者は交る／＼決意の程を宗吾の前に披歴した。

『ようこそ皆さん云ふて下さつたそれで宗吾も安心しました、皆さんの其決心が宗吾へ何よりの餓別、そこで』

と宗吾は何事か言ひ憎相に一寸躊躇したが、頓て思ひ直したらしく語を續いた、

『こなさん達に、申し惜い事だが今度の發足は、事の成否にかゝわらず、迎も宗吾の命はないもの、付ては縁に連がる女房子供

が、まき添へ喰ふ不便さに、幸ひ遠くもあらぬ我家に立寄り、此方の始末もつけ、心置きのう起たうと思ふが、此事お許し下さるまいか、此期になつて女々しい事だが、宗吾も凡夫、愛着の絆には迷はされまするツイ』

と言つて流石剛氣の宗吾もさし俯いた。

八  
逢ふ事も出来様が、そなたは萬々六ヶ敷い、二世三世の別れ、誰れに遠慮が要らうか』

『そなたとも／＼、それに、どうせ通りは裏道傳ひ、追手は真直に江戸へ向ひ、其爲め都合なるやも知れぬ、充分別れを告げて心置き無う行きなされ』

別れの盃を取り交したいのじやが、酒どころか水も手に入らぬ』

先きから霰を交へて居た寒風は止んで、今は雪となつたらしい、話の切れ間には、シン／＼と積る音さへ仕出した、バサツと裏庭の笹の葉に音に心付いた牛十郎は立ち上がつて、靜に兩戸を押し開き屋根の雪を兩手で掻き集めて持つて來た。

『酒は之れじや』  
『ソナナ酒、餘り吞まうものなら

腹を痛める』

『イヤ、時に取つての名案じや』

『佐倉十三萬石のため、宗吾どの、清い旅立ちに雪酒とは格好じや』

『まあ、腹の痛まぬ様喰べ、イヤ飲む事じや』

『アハ、、、アハ、、、』

低い、淋しい、悲しい、泣く様な笑聲が一同の口から漏れた。其時表口の彼方に

『火の用心！』  
除韻は長く寒空の彼方に、悲し氣

に消へて行く。

(2) 印旛沼の渡し場、

饅頭笠に引廻し合羽、面を深く包んで旅拵へ嚴重に雙の草鞋に降り

積む雪を、踏みしだきつ、更け行く夜に、此處印旛沼の湖岸に立つた一人の旅人、周圍に心を配りながら、忍び足に渡船場守りの、

小屋の方へと歩み寄つた。

『オウーイ、爺さん、爺さん』  
『アア、誰れだい、此夜更けに駄目だよ、御用の外は渡すこと

なんねエだ』